

令和2年度 卒業証書授与式 式辞（令和3年3月2日）

数年ぶりに雪の多い冬でしたが、寒さの中にも春の気配を感じる頃となりました。本日ここに、新潟県立長岡高等学校 第73回卒業証書授与式を挙げるにあたり、同窓会長様、後援会長様にはご多用のところご臨席を賜り、心から厚く御礼申し上げます。

ただ今は、普通科226名、理数科75名の皆さんに、卒業証書をお渡しいたしました。卒業おめでとう。心からお祝いいたします。

この一年は、世界中が、新型コロナウイルス対策の一年でした。本校でも、様々な取組を例年どおりに行うことができませんでした。しかし、皆さんは、たくましいというか、適応力があるというか、ちょうど昨年今頃の学校の臨時休業期間や、6月からの学校再開後においても、限られた条件の中で最大限の成果をあげられるよう、前向きに学校生活を過ごして来たと思います。そんな皆さんの姿は、私にも大いに勇気を与えてくれました。本当にありがとうございます。感謝しています。

さて、私は今まで、皆さんに、自らがどう生きるべきかを考えてほしい、社会にどう貢献できるかという目を持ってほしい、夢を持ち続けて努力してほしい、そして、充実した人生を送ってほしいと願って、いろいろな機会にお話ししてまいりました。本日はあなた方全体にお話できる最後の機会です。今日は、皆さんへのはなむけの言葉として、「これまでに批評家の銅像が立てられたためしはない。」というお話をします。

これは、フィンランドの作曲家、ジャン・シベリウスの言葉です。

「これまでに批評家の銅像が建てられたためしが無い。」というのは、これから皆さんが目標に向かって行動するとき、または行動した成果に対して、他人の批評を気にする必要はないということです。また、物知り顔で当事者意識なく、物事を批評しているだけでは、物事は改善しないということです。本当に価値あることは、自ら生涯勉強を続け、困難な状況でも失敗を恐れず挑戦し、そして、社会に貢献していくことだということです。

20世紀はじめのセオドア・ルーズベルト アメリカ第26代大統領も同様の台詞を残しています。「大切なのは評論家ではない。実力者がどのようにつまづいたかを指摘する人物はいらない。顔を泥と汗でよごしながら実際に現場で闘っている人、勇ましく立ち向かっている人、最善の場合に、最終的に大成功をおさめる喜びを知っている人、最悪の場合はたとえ失敗したとしても、勝利も敗北も知らない臆病な連中とは違う、あえて勇敢に立ち向かった結果として失敗した人、そういった人たちをこそ、称賛すべきなのだ。」

皆さんは、4月から、大なり小なり緊張を強いられる新しい環境に飛び込みます。難儀することもあるかもしれません。おそらく、うまくいかない、成果が得られないという悔しさを味わうことも、多くあるでしょう。でも、その経験が、皆さんに人間の幅と

深みを与えてくれ、次のチャンスを生み出す元となるのです。

皆さんがこれから迎える近未来の社会は、モノのインターネット（IoT）、ビッグデータ、人工知能（AI）、ロボットなどがもたらす「超スマート社会」（Society 5.0）に向かうのだそうです。本当に、そんな社会が来るのでしょうか。未来の社会は、自然にできていくのではなく、皆さんが創っていくものです。

皆さんには、周りの批評を気にすることなく、また、皆さん自身が批評家になることなく、常に前を向いて様々なことにチャレンジし経験を積んで、自信と実力を蓄えてほしいと思います。そして、これからの新しい時代の、この日本を、世界をリードする一員になってほしいと願っています。

生涯勉強、生涯チャレンジ、生涯社会貢献です。元気に頑張りましょう。

最後になりましたが、保護者の皆様、お子さんのご卒業おめでとうございます。

本日の卒業式が、コロナ禍の中とはいえ、無事に実施できましたことに、私も、本当に良かったと感じております。

皆様には、3年間本校に対して、陰に日向に、ご協力をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。大変ありがとうございました。

結びに、卒業生の皆さん一人一人が、それぞれの世界に向けて力強く旅立つ、その前途に幸多からんことを心から祈念して、式辞といたします。

令和3年3月2日

新潟県立長岡高等学校長 宮田 佳則